



# 第二中学校だより

令和6年2月号

↓二中ホームページ↓



「明るい挨拶 光る汗 きれいな学校 きれいな心」

## 言葉だけでは気持ちは伝わらない

校長 小関 直

長年教員をやっていると、子供同士の様々なトラブルに遭遇します。でも、その大半は些細なものです。些細なトラブルに対して教員がすべき対応は、一昔前までは謝罪指導が中心でした。「ごめんなさい」「うん、いいよ」と双方に言わせるまでが一連の指導であり、それで大抵の方が付いていました。何よりも「謝った」、「許した」という「形」が仲直りの証でした。ですから、怒りや気分の高まりは自分自身で沈めるのが当然で、後で蒸し返すようなことは稀でした。子供なりのコミュニケーションの土台ができていたからこそその対応であったように思います。

近年は、コミュニケーションの在り方に頼りなさを感じます。感情の交流が前提になく、形が先行してしまっているためです。反省もなくすぐに「ごめんなさい」と言う子が増えました。さらに、立場をすり替えて「謝ったのに許してくれない」と主張する子さえいます。逆に、些細な事柄にまでこだわって、友達関係を修復できない子も増えました。無理に我慢する必要はありませんが、前向きな生活をなかなか取り戻せず、苦しい思いをしているようで心配になります。

### メラビアンの法則

本校に限ったことではありませんが、授業における発表やスピーチを聞いていると、単なる棒読みに終始している場面を多く見かけます。これは相手意識をもたずに文字面ばかりを追って声に出しているからです。では、どうすれば相手意識をもった良い話し方にレベルアップさせることができるのでしょうか？

アメリカの心理学者メラビアンは、コミュニケーションを図る時に、相手の印象を決めるのは言葉以外の要素が93%であることを明らかにしています。つまり、言葉だけでは相手にうまく自分の思いを伝えられないこととなります。機械の音声心が心に響かないのはそのためです。では、他にどんな要素が大切なのでしょうか？メラビアンの法則では、

- ・身だしなみやしぐさ、表情、視線(視覚情報 55%)
  - ・声の速さ、高低、大きさ、テンポ(聴覚情報 38%)
- と、説明されています。

子どもたちにこれらの要素を伝え、どんな内容をどのように伝えるのが有効なのか考えさせることも中学校の役割になってきました。以前は、些細なトラブルが多い小学校で有効な指導の一つでしたが…。

将来社会で生きていくためには、必ず自分以外の誰かと協力していかなければなりません。その時に様々なコミュニケーションをとることが求められます。しかし、言語的な部分は1割にも満たない、7%しか相手に伝わらないのですから、コミュニケーションがどのように相手に伝わるかを理解しないと失敗してしまいます。

もしどこかのお店で棒読みの対応をされたらどう思うでしょうか。多くのチェーン店では接客時に、このようなコミュニケーションを構成する要素をきっちり分析し、マニュアルを作成して働く人の研修にあたっています。

### コミュニケーションを身につける

学校で行われる群読や合唱、英会話や話し合い活動などはまさにコミュニケーションの力を伸ばすためのトレーニングだと言えます。たまにやるのでは力は伸びません。少しずつでいいから毎日続けていくことが大切です。そして少しでもいいから伸びていることを意識することが大切です。従来型の一斉指導のみでは、生きて働く力が身につかないことが明らかになっています。先生がしゃべって板書をし、生徒は先生の話聞いて黒板をノートに写す。そんな授業は評価されなくなりました。主体的で対話的な学習を通して、将来社会に出て役立つような力を身につけていけるよう授業も工夫していかなければなりません。

他方、家庭ではお子さんとどのようにコミュニケーションをとっているのでしょうか。幼少期や小学生の頃との違いを意識しているのでしょうか。保護者の方から「中学生になってからあまり話をしなくなった。」という声をよく聞きます。親としては寂しさもありますが、コミュニケーションの変化は成長の証でもあります。メラビアンが明示した言語以外の要素も意識して会話してみると、お子さんの新たな一面が発見できるかもしれません。「手を離して目を離さず」のコミュニケーションです。

かつてベストセラーになった「人生に必要な知恵はすべて幼稚園の砂場で学んだ」という本があります。幼少期の体験がいかに大切かを考えさせられます。人生には、様々な理不尽が待ち受けており、人間関係で苦しむことも多々あります。学校は、大きなつまづきでなければ、多少の理不尽を学ぶ場であってもいいのかもしれませんが、免疫の獲得ってそんなものだとも思います。